第八章　薫の物語　女二の宮、薫の三条宮邸に降嫁

［第一段　新年、薫権大納言兼右大将に昇進］

*正月晦日方より（新年正月の月末になって）、*例ならぬさまに悩みたまふを（御方がいつになく気分の悪さを訴えなさるのを）、宮、まだ御覧じ知らぬことにて（匂宮はまだ妊婦の体調変化を見知りなさらなかったので）、いかならむと、思し嘆きて（どうしたことかと驚き慌てて）、御修法など、所々にてあまたせさせたまふに（安産祈願のご祈祷などはあちらこちらの寺寺に多くさせ為さっていたところに）、またまた始め添へさせたまふ（今回は更に他の寺も加えて祈祷させなさいます）。　*「正月晦日方」は「しゃうぐぁちつごもりがた」と読みがある。注には＜薫二十六歳、匂宮二十七歳、中君二十六歳。＞とある。が、この年齢認知には同意しない。私見では、薫君 27 歳、匂宮 28 歳、対の御方 27 歳、と成るはずで、是は当巻冒頭の「そのころ」を早蕨巻の前年と見るのか、同年と見るのかによる違いかと思うが、私は同年と見ていて、此処までそれで破綻は無かった、と思っている。この問題に付いては、次の文に格好の項目が出てくるので、其処で考えたい。　*「例ならぬさまに悩みたまふを」は注に＜中君の出産が近づく。昨年の五月ころから懐妊の徴候が表れた。＞とある。

いといたくわづらひたまへば（御方はとてもひどく苦しみなさったので）、后の宮よりも御訪らひあり（皇后からも御見舞の使者が遣わされました）。*かくて三年になりぬれど（こうして年が改まってみると、御方が二条院に輿入れして三年目となっていたが）、一所の御心ざしこそおろかならね（匂宮お一人のご寵愛は深かったものの）、おほかたの世には（政府全般に於いては）、ものものしくももてなしきこえたまはざりつるを（御方を夫人格として丁重に持て成し申していらっしゃらなかったので）、*この折ぞ（この皇后の妊婦御見舞があったことを）、いづこにもいづこにも聞こしめしおどろきて（各要人たちも聞き付けなさって夫人の懐妊を知って驚いては）、御訪ぶらひども聞こえたまひける（二条院に御見舞の品々を贈り申しなさいました）。　*「かくてみとせに」について、注には＜『集成』は「こうして三年になったけれども。中の君が二条の院に移ってから三年と読める。この年（宿木の第三年）を、中の君が二条の院に移った早蕨の春の翌年とするのが現行の年立の処理であるが、それでは二条の院移転から足掛け二年しかならない。この第三年をもう一年あとにずらしてはじめて足掛け三年という計算になる。諸注、匂宮が宇治に通うようになった総角の秋以来足掛け三年と見るが、無理であろう」。『完訳』は「結婚以来、足かけ三年」と注す。＞とある。さて、「この年（宿木の第三年）を、中の君が二条の院に移った早蕨の春の翌年とするのが現行の年立の処理である」という学会の立場の合理性は、いったい何処の何を根拠としているのだろうか。もし、後述記事で事態推移の年次が回想され、宇治妹君が二条院入りと同年に妊娠したと明示されるなら、出産があるであろうこの年が、なるほど「足掛け二年しかならない」と分かる。が、私が既に当巻に於いて何度かノートして、ずっと注意し今も留意しているところの、当巻冒頭の「そのころ」を宇治姫の二条院入りと同年と見做すことによる破綻は、此処まで本文を読んで来た限りは無いのであって、であれば、一章五段末の「されど、その年は変はりぬ」で、話は宇治姫の二条院入りの翌年に移っていたのであり、素直に読んでこの年で「足掛け三年という計算になる」のであり、此処の「かくて三年になりぬれど」も素直に＜御方が二条院入りして三年目になったが＞と読める。というか、この「かくて三年になりぬれど」を以て、一章五段の「されど、その年は変はりぬ」が二条院入りの翌年だと裏付けされ、冒頭の「そのころ」が二条院入りと同年のことと確認できる、というのが此処までの本文記事だ。そもそも私が妙に緊張を強いられて、年次に注意しながら読まなければならないのも、特にこの続編に於いての巻序や年立てが、信じられないことに、この 2013 年現在に於いても、学会で整理されていないという恐るべき事情を背景として、当巻冒頭の「そのころ」を「なむおはしける」という傍流事情ゆえの引いた表現を、過去を引

いた語りと解して＜漠然とした過去をさし＞と注釈し、素直に早蕨巻に続けて読み進むことを妨害した学会の姿勢にある。もし、私の解釈に誤りがあるなら、本文引用を以て指摘してもらいたい。というより、一般課税徴収で運営する民主国家にあって、一般読者の読解に資して理解を導くべく、国家権威機構によって博士号を冠された国文学学会員ならば、冒頭の「そのころ」が二条院入りの前年だと指摘する以上は、先にその根拠を本文引用の傍証を以て示していなければならないはずだ。さて、気を取り直して読み進む為に、主要登場人物の年齢を整理すれば、薫君 27 歳、匂宮 28 歳、対の御方 27 歳、源氏六姫 23 歳、女二の宮 16 歳、今上帝 48 歳、明石中宮 46 歳、源氏右大臣 53 歳、入道宮 48 歳、弁尼君 60 歳代半ば、そして故八宮の別腹姫 21 歳。　*「このをり」は「后の宮よりも御訪らひあり」のことだろう。

中納言の君は（中納言の薫君は）、宮の思し騒ぐに劣らず（匂宮が狼狽なさるのに負けず劣らず）、いかにおはせむと嘆きて（どうしていらっしゃるのかと御方を案じて）、心苦しくうしろめたく思さるれど（不安で心配に思われなさるが）、限りある御訪らひばかりこそあれ（分に応じて定まった型通りの御見舞はするものの）、あまりもえ参うでたまはで（それ以上懇意には参上なされないので）、忍びてぞ御祈りなどもせさせたまひける（人目を忍んで私事としてご祈祷なども上げさせなさいます）。

*さるは（ところで、その頃、実は）、*女二の宮の御裳着、ただこのころになりて（女二の宮の御裳着がちょうど同じ時期のことなので）、世の中響きいとなみののしる（宮廷挙げてその準備に取り掛かっています）。　*「さるは」は、「さ」が上文の話題を示して、それに関わる論理展開を進める前置句として＜その実は、しかし実は＞という言い方になるらしく、此処でも＜実は薫君の事情としてはその頃＞という文意を大枠では成しているように見えるが、差し当たっての語り口調は宮廷事情に移り、薫君の主語文ではないので、此処では単に話題展開の副詞語用の＜実は、ところで＞という言い方で、此処の「さ」は＜その時＞という一般同時性を示す、と取って置く。　*「女二の宮の御裳着」は注に＜今上帝の女二宮。母は故左大臣の娘藤壺女御。裳着の儀式は結婚を前提に行われる。薫との結婚が本格化する。＞とある。女二の宮は一昨年の春の話題に「十四になりたまふ年、御裳着せたてまつりたまはむ」（一章二段）とあったが、母藤壺女御がその夏に急逝して、姫宮はそのまま一年服喪していた。で、昨年夏の喪明けから薫君との縁談が進み始めて、今年は遂に降嫁するらしく、それに先立つ裳着ということらしい。16 歳だ。

よろづのこと（すべての仕儀次第仕様は）、帝の御心一つなるやうに思し急げば（帝の御考え一つによるものとして取り決めなさり準備を進めなさるので）、御後見なきしもぞ（藤壺女御が逝去されて、母方の世話役がいないのも）、なかなかめでたげに見えける（却って御立派な式になりそうな気配です）。女御のしおきたまへることをばさるものにて（故母女御が用意なさっていた祝儀用の調度類に加えて）、*作物所（宮中の調達部や）、さるべき受領どもなど（名品の産地の地方長官たちなどが）、とりどりに仕うまつることども（挙って奉仕申し上げることと言ったら）、いと限りなしや（もう大変な張り切りようです）。　*「作物所（つくもどころ）」は古語辞典に＜「つくりものどころ」の約＞と補説され＜蔵人所の所管で、宮中の諸調度を調達する所。＞とあり、調度の製作や修理をしたお抱え指物師みたいなものだろうか。

*やがてそのほどに（引き続いて、その裳着式の時から）、参りそめたまふべきやうにありければ（中納言が女宮の婿君として、通い始めなさるように話が着いていたので）、男方も心づかひしたまふころなれど（薫君も婿殿として気構えなさるところだが）、*例のことなれば（例によって、

相手は皇女とは言え、伯父方の従姉妹に過ぎないという血縁の近さから)、そなたざまには心も入らで(この結婚には熱が入らず)、この御事のみいとほしく嘆かる(御方のお加減の方ばかりを心配なさいます)。　*「やがてそのほどに参りそめたまふべきやうにありければ」は注に＜女二宮の裳着の儀式に引き続き、薫が婿として通うようになっていた。＞とある。此処の文意は、こういう事をこういう言い方をする、という当時の事情を知らなければ、字面だけでは読み取れない。とにかく訳文と注無しには、私には絶対に分からない。　*「例のこと」は＜出世に無頓着な性格＞みたいなことなのだろうが、御方に熱を上げている今となっては、厭世観とも言い難いので、いっそ薫君自身の皇女を母に持つ選民意識を敢えて補語して置く。

如月の朔日ごろに(きさらぎのついたちごろに、二月の初旬に)、*直物とかいふことに(追加人事という事で)、権大納言になりたまひて(薫君は権大納言に就きなさって)、右大将かけたまひつ(右大将を兼務なさいます)。*右の大殿、左にておはしけるが(右大臣の源氏殿が左大将を兼務なさっていたのを)、辞したまへる所なりけり(近衛職兼務をお辞めになったことによる順送り人事なのでした)。　*「直物(なほしもの)」は＜除目(ぢもく、定期人事)の後の追加任命＞と古語辞典にある。　*「みぎのおほいどの、ひだりにて」は注に＜夕霧右大臣兼左大将が、左大将を辞任したので、それまでの右大将が左大将に転じ、薫が権大納言兼右大将となった。＞とある。右が左っていうのが面白い響きで、字面だと分かり難い文にも見えるが、「右大将かけたまひつ」に続いて「右の大殿、左にておはしけるが」という言い方は、語り口調では普通だ。兄の源氏殿が異腹弟の薫君に祝儀で座を譲った、みたいなことだろうか。国の中枢人事が、帝ぐるみの家庭内のお手盛りで決まるとすれば、それはその裏にパワーバランスがあってのことだろうし、その穏やかさはお目出度いのかもしれないが、平和が許されている井戸の中の話ではあるのだろう。

喜びに所々ありきたまひて(薫君は就任御礼に諸侯を表敬なさって)、*この宮にも参りたまへり(二条院にも参上なさいました)。　*「この宮」はこの語だけで＜二条院＞を指すのか、それとも「この宮」自体は＜匂宮＞を指して、その匂宮がいらっしゃる＜二条院＞という言い方なのか。だとしても、匂宮が二条院に居ることは普通の事なのか。基本は六条院で、偶々この日は二条院にいたのか。予め舞台設定があった上での「この」なら素直に分かるが、大枠の話運びで二条院が主たる舞台とはいえ、直前の対象とは別に近称を語用して、この「この」という手馴れた言い方を以て場面の舞台設定を図るという語り口は、何度も言うようだが、それでも言わずに流しているのがほとんどだが、いつまでも馴れない。本当に分かり難い語用で、それでも「この宮」が二条院以外のこととは思えないので文旨は分かるが、いちいち面倒だ。

*いと苦しくしたまへば(御方がひどく御不調を訴えていらっしゃるので)、*こなたにおはしますほどなりければ(匂宮も対の御部屋にいらっしゃる時だったので)、*やがて参りたまへり(薫君は沓のまま庭伝いに西の対屋へお進みなさいました)。　*「いと苦しくしたまへば」の主語は御方で妊娠後期の圧迫感に苦しんでいるということらしい。訳文を読めばなるほどと分かるような気がするが、こういう主語省略はいつまでも馴れない。　*「こなた」は御方の部屋である＜西の対＞のことらしい。「おはします」の主語は匂宮らしい。こういう紛らわしさは何も此処だけではなく、むしろこの物語では普通なのだから、こういうことでいちいちノートするのも却って邪魔臭い気もするが、こういう紛らわしい言い方は、仮にそれらしい察しが付く文でも、他の可能性を潰さないと文意が特定できないので、読者に対して非常に不親切だ。いや、場面設定がある場合なら、話題対象が読者に共有されているので、不完全な、または簡略化した表現が、却って論旨を分かり易くさせることはあるし、日常会話では場の共有が前提なので、むしろ、省略表現の方が普通だし、論旨が絞られて誤解も少ない。が、斯くも登場人物の多い、話の入り込んだ長編小説で、やたら省略表現を使われては読者に迷惑だ。と、此処で気付く。私などは、この作者が意図している読者では無いのだ。この物語は、あくまで宮廷生活者同士の、そうい

う場を共有をしている人たちの仲間内での楽しみなわけだ。場違いは私の方だった。だから辛い。いや、そう思って、この手のノートは控えている心算だが、此処の文は、やはり分かり難い。　*「やがて参りたまへり」の「やがて」は＜そのまま＞という言い方だろうが、何の何が＜そのまま＞なのか。主語は薫君だから、上文の「この宮にも参りたまへり」のまま「こなたに」もまた「参りたまへり」とは語られている。で、下文を見ると、匂宮が「下りて答の拝したまふ」と語られるので、薫君も庭に下りていたとすれば、薫君は中門から廊下へ上がらずに、沓のまま庭へ抜けて、西の対へ向かった、という事が想像できる。であれば、この「そのまま」は＜沓のまま庭伝いに＞という事を言っている、と読めそうだ。ところで、この「やがて」という副詞だが、是は現代語だと＜(そういう傾向なので)その内に～そうなる＞と語用されて、古語の＜そのまま、ただちに、すなわち、とりもなおさず＞という語用とは違う。折角なので、序に少しこの辺の理由を考えて見る。と、「やがて」の「て」は説明項を示す助詞ということで現代語でも古語でも納得できそうな語感だ。で、「やが」だが、是は「若やぐ」とか「華やぐ」の状態傾向を示す接尾語「やぐ」の未然形っぽく見える。他に思い付く語が無いので、そう決め付けて見る。と、「若やがで」とか「華やがば」とは聞かないが「若やか」「華やか」という語はあるので、「やぐ」の「や」は「やう(様、形態・傾向)」で、「ぐ」は「く(来、行く・進む)の強調音、みたいに思えてくる。だから、「やがて」は＜その形のまま進んで＞が元々の言い方だった、とすれば、古語の語用は説明が付く。ところが、正に此処の文でもそうだが、「その形」が何を示すのかは対象体の属性が多様な場合は話者の意図が聞き手に伝わり難い。で、次第に「やがて」は具体意の語用から概念意の語用に移って、その事物の＜当該傾向が続くとやがて＝少し時間が経てば＞という言い方になった、というのが今日の思い付き。

僧などさぶらひて便なき方に(晴れの公職新任挨拶を、祈祷僧などがいる散らかった私的な部屋で受けては不都合な)、とおどろきたまひて(と匂兵部卿宮は慌てなさって)、あざやかなる御直衣(晴れやかな御色上着に)、御下襲など*たてまつり(礼装の下垂れ布を着装なさり)、*ひきつくろひたまひて(改めて寝殿で薫大将の拝礼をお受けになり)、*下りて答の拝したまふ(階を下りて返礼の拝舞をなさいます)。　*「たてまつる」は此処では匂宮が主語の自動詞の尊敬語らしい。　*「ひきつくろふ」は＜体裁を整える。あらたまった態度をとる。気取る。＞と大辞泉にあり、訳文には＜身づくろいなさって＞とある。確かに、「たてまつり引き繕ひ給ふ」とも読める気がするが、「たてまつり」で＜威儀を正しなさって＞と読むなら、「引き繕ふ」は＜改めて遣り直す＝寝殿で正式に挨拶を受け直す＞という意味かも知れない。「繕ふ」は＜修理する＝不備を直す＞という語感だし、「答(たふ)」は返礼だから、先に受礼はあるだろう。　*「おりてたふのはいしたまふ」は注に＜主語は匂宮。この邸の主の匂宮が南階から庭上に下りて拝舞の礼を薫に返す。＞とある。

御さまどもとりどりにいとめでたく(薫大納言兼右大将も匂兵部卿宮もそれぞれにとてもご立派なお姿で)、

「やがて(このままご一緒に)、*官の禄賜ふ饗の所に(任官の記念品付き慰労親睦会に、行きましょう)」　*「つかさのろくたまふあるじのところ」は注に＜薫の詞。匂宮を右大将新任の披露宴の席に招待。＞とある。また、訳文には＜近衛府の人に禄を与える宴会の所＞とある。長官主催の、部下に新任を歓迎させる宴会、みたいな感じ。近いのは新任記念品と慰労親睦会あたりか。

と(と薫君が匂宮を)、請じたてまつりたまふを(招待申し上げなさるが)、悩みたまふ人によりてぞ(宮は苦しがっていらっしゃる御方がいるので)、思したゆたひたまふめる(心配でお出掛けを迷っていらっしゃるようです)。

右大臣殿の*したまひけるままにとて(宴会は右大臣源氏殿が御自分の大臣就任の時と同様にと用意なさって)、六条の院にてなむありける(六条院で催されました)。　*「したまひけるままに」は源氏殿の大将就任時のようにかと思い、だいぶ前のことだろうし、同様の次第と言っても具体性が乏しく、何を言っているのか分からない文だと思ったが、下に「大饗に劣らず」とあり、「大饗(だいきゃう)」は大臣主催の大宴会で、特に新任時の大饗は「臨時」とわざわざ言葉があるほど盛大だったらしく、つまりは様式・次第が定型化していて具体性がある言い方だった、らしい。尤も、私には具体的な次第は分からない。

*垣下の親王たち上達部(列席する親王や高官たちは)、*大饗に劣らず(右大将の就任祝いだというのに、大臣主催の宴会に劣らず)、あまり騒がしきまでなむ集ひたまひける(騒がしすぎるほど盛大に参集なさいました)。　*「垣下」は「ゑんが」と読みがある。大辞泉に＜平安時代、朝廷や公卿などの恒例・臨時の行事の供応の席に伺候した、正客以外の相伴の人。えが。かいもと。かいのもと。＞とある。身内筋の貴族の面々、といったところだろうか。　*「大饗に劣らず」は注に＜大饗は大臣新任の宴。ここは大将新任の宴だが、それに劣らず盛大の意。＞とある。

この宮も渡りたまひて(匂宮も出席なさったが)、静心なければ(御方が心配で落ち着かないので)、まだ事果てぬに急ぎ帰りたまひぬるを(宴会の途中で急いでお帰りになったのを)、*大殿の御方には(六条院の夫人に於かれては)、　*「大殿の御方(おほとののおおんかた)」は注に＜夕霧の六君方。匂宮が立ち寄らずに帰ってしまったことに不満。＞とある。この「大殿の御方」はこの場だけの、または六条院での呼称なのか。ある程度は公式性がある気がするので、今後多用されるのだろうか。少し注意したい。

「いと飽かずめざまし(意外だし呆れちゃう)」とのたまふ(として、こう仰います)。

「劣るべくもあらぬ*御ほどなるを(向こうの家の対の御方は、王家血筋で私に劣るはずがない御身分だからと)、ただ今のおぼえのはなやかさに思しおごりて(ちょっと今持ててることに良い気におなりになって)、おしたちもてなしたまへるなめりかし(私と張り合いなさろうっていう心算なんだわ)」　*「おおんほど」は＜御身分＞という言い方のようで、「劣るべくもあらぬ」とわざわざ言うのだから、圧倒的な優位に立つ源氏姫のことであるはずもなく、ということはこの「御身分」は＜御方の御身分＝王家の子女＞のことらしい。となると、「御ほどなるを」の「を」は、「なり」という判断に基づいて、「なるものを」と以下に何かの論旨を展開する意図を示す論理助詞で、それが＜だから＞という説得意なのか、または＜だというのに＞という反論意なのかは、下文の展開に示される。この「を」を言った時点では「ほどなり」という認識を場で共有させることに留まっていて、聞き手に意識集中を促している。で、「御ほど」であることで、下文は「おしたちもてなしたまへる」と展開されるので、この「を」自体は＜だから＞の意味となり、準接の接続助詞という文法仕訳に結果する。が、「なめりかし」と憎憎しく吐き捨てた口調は、この文全体の論旨が反発心から成されたものである事を示す。ところで、注には此処の文を＜八宮の娘である中君は臣下の夕霧の娘六の君に劣らない、とする語り手の批評。『湖月抄』は「草子地也」と指摘。＞とあるが、是が六姫の不満でなくて、一体何だと言うのか。

[第二段　中君に男子誕生]

からうして(出産は長引いたが、やっと)、その暁(次の日の明け方に)、*男にて生まれたまへるを(第一子が男の子にてお生まれになったのを)、宮もいとかひありてうれしく思したり(宮も

とても手応えのある存在に感じて嬉しくお思いになりました)。　*「をとこにて～」は注に＜中君、男子を出産。＞とある。少し社交的に言えば、御方腹になる兵部卿宮の第一子である。

*大将殿も(右大将になった薫殿も)、喜びに添へて(自身の昇進に加えて)、うれしく思す(対の御方の無事な御出産を嬉しくお思いになります)。昨夜おはしましたりしかしこまりに(兵部卿宮が昨夜薫殿の右大将就任祝いに御参列下された御礼挨拶に)、やがて(その足で)、この御喜びもうち添へて(この御出産祝いも兼ねて)、*立ちながら参りたまへり(手短に二条院に参上なさいました)。　*「だいしゃうどの」と薫君を呼称するのは是が初めてだ。そのこと自体は就任したばかりなのだから、此処で呼称が変わるのは当然だが、薫君は権大納言になったのでもあり、今まで中納言と呼称されていたことからすれば、大納言殿と呼ばれてもよさそうだが、権官という補助任命は特別待遇でもあると同時に非正規の頼り無さがあるのかもしれず、それに引き換え、近衛府の大将は左右各一名の定員と定められていて、天皇側近として如何にも国体の中枢を体現する存在であってみれば、やはり「大将殿」の響きの重さは圧倒的なのだろう。　*「立ちながら」は大辞泉に＜［副］《立ったままでの意から》ほんのちょっと。ちょっとの間。＞とある。注には＜出産の穢れを避けるため、着座しない。＞とあるが、そういう具体的な慣習指摘は確かに私にとって助かる知識ではあるが、此処の文意として＜穢れを避けるため＞が意図されているとは思えない。この「立ちながら」は＜ごく短時間＞であり、それは「着座しない」でのことだったかもしれないし、何よりも＜訪問先からの持成しを受けずに＞という事だったように思う。相手に手間取らせない、というのは＜穢れた家だから＞という言い方で、その訪問先の応接しない非礼を許す社会的方便で、実際には、出産後の慌しさのなかで来客応対は出来ない、という事情に即した良識だったのだろう。いや、本当に赤子を取り上げた産婆が血まみれの手で出て来たら、そのまま茶飲み話の出来よう筈もないが、本当にそれが穢れた家ということになるなら、近付く事自体が憚られる。

かく籠もりおはしませば(匂兵部卿宮がこのような事情で二条院に留まっていらっしゃるので)、参りたまはぬ人なし(諸侯や高官たちで二条院に出産祝いに参上しない者は居ません)。

*御産養、*三日は、例のただ宮の御私事にて(御出産祝いの三日目の夜は普通の単に兵部卿宮ご自身でする御身内ごとで)、*五日の夜(五日目の夜の御祝いは母方の祖父母が催すとの事で)、大将殿より(御方の親代わりとして薫大将殿から)屯食五十具(とんじきごじふぐ、従者用の弁当五十食)、*碁手の銭(囲碁遊戯用硬貨)、*椀飯などは(酒肴の給仕接待などは)、世の常のやうにて(世の習わし通りに用意されて)、*子持ちの御前の*衝重*三十(産婦である御方に供えられた祝料理の三十膳や)、稚児の御衣五重襲にて(ちごのおおんぞいつへがさねにて、赤子用の衣類は五枚一組のもので)、*御襁褓などぞ(オムツ用の生地など)、ことことしからず(特別な物は無く)、忍びやかにしなしたまへれど(薫殿は目立たないようになさっていたが)、こまかに見れば、わざと目馴れぬ心ばへなど見えける(良く見ると、凝った目新しい趣向などが見えました)。　*「おおんうぶやしなひ」は「産養」の文字からすると母体の産後養生を言うもののように見えるし、およそその期間は産婦は休養するのだろうから、実質ではそういう意味合いも有るのかも知れないが、差し当たり此処の「御」は王家の御子である新生児に対する敬称なのだろう。また、そうであるなら、是は＜御出産祝い＞ではなく＜御成育祈願＞に近い語感かもしれない。が、何れにしても関係縁者がする祝儀宴会ではありそうで、大辞泉には＜出産後３日・５日・７日・９日目の夜に、親類が産婦や赤子の衣服、飲食物などを贈って祝宴を開くこと。また、その贈り物。平安時代、貴族の家で盛んに行われた。現在の「お七夜の祝い」はこの名残。＞とある。　*「三日(みか、三日目の祝宴)」は此処の「御私事(おおんわたくしごと)」という記事からすると、御当家内だけでする格式張らないものだったようだが、「例の」と言われても、それが今の核家族のような小集団を示さないことは確かで、実際どのようなものだったのか、

私にはさっぱり分からない。　*「いつかのよ」は女方の親がする御祝いらしく、薫殿が御方の親代わりを務めた、ということらしい。　*「碁手の銭」は、「碁手(ごて)」が＜囲碁の勝負に賭ける物＞で、「銭(ぜに)」が＜硬貨＞とのことで、そのままだと＜囲碁勝負用硬貨＞ということのようだが、他人の資金を賭ける、ということは競技当事者の信頼関係上から真剣勝負が成立しないので、是は胴元として賭金を調達する、とは即ち胴元の器量として賭金不足者に資金を信用貸しする、ということだろう、かとも考えた。が、祝いの席の遊戯であってみれば、そも真剣勝負ではなく、競技者双方に主催者から予め小銭を与えて、それを取り合わせた、のだとすれば、是は＜囲碁勝負用硬貨＞ではなく＜遊戯囲碁用硬貨＞と見るべきだろう。　*「椀飯」は「わうばん」と読みがある。「わんばん」の訛りらしく、意味は＜食器に盛った飯＝お椀のご飯＞とのことで、漢字からきた語だとすれば、「椀」が「わん」なのか「わう」なのかの正誤は難しい。ところで、「わう」は今の仮名遣いで「おう」と発音する。だから、「椀飯」は「おうばん」で「大盤振る舞い(大接待)」の元になった「椀飯振舞」のことでもあるらしい。だから、この「椀飯」も＜接待＝酒宴での給仕＞なのだろう。　*「子持ちの御前(こもちのおまへ)」は＜対の御方用＞のことで、この場ならではの語用なのだろう。　*「衝重(ついがさね)」は＜《「つきがさね」の音変化》供物(くもつ)や食器をのせるのに用いる、ヒノキ製の膳(ぜん)の一種。折敷(おしき)に四角の台をつけたもの。ふつう、白木でつくり、台の三方に穴をあけたものを三方(さんぼう)、四方にあけたものを四方、穴のないものを供饗(くぎょう)という。＞と大辞泉にある。お供え物をのせる御膳のことらしい。　*「三十(さんじふ)」は数字だが、是が本当に30種か30個の料理なのか、多種・多用・多量などをいう言い方なのか、「30」という数に意味があるのか、などは不明。取り敢えず、30種の料理にして置く。　*「御襁褓」は「おおんむつき」と読みがある。「産着(うぶぎ)」に似た語感だが、要は＜おむつ＝おしめ＞のことらしく、見慣れない漢字で間誤付くが、通りで＜オムツ＞とカタカナが多用されるわけだ。

宮の御前にも*浅香の折敷(兵部卿宮の御前にも香木製の角盆を)、高坏どもにて(たかつきどもにて、高い脚の台に乗せて)、*粉熟参らせたまへり(餅菓子をお供え申しなさってありました)。*「浅香の折敷(せんかうのをしき)」は＜軽めの香木で作った方形のお盆＞とのことで、「折敷」は普通＜檜(ひのき)のへぎで作った縁つきの盆。＞と大辞泉にあるので、高級品ではありそうだ。　*「粉熟」は「ふずく」と読みがある。小麦や米や豆の粉を捏ねて造った餅菓子らしい。

*女房の御前には(女房たちの前には)、*衝重をばさるものにて(祝儀用の飾り料理の方は在り来たりにしてあるが)、*桧破籠三十(蓋付き弁当箱の三十種類の料理の方は)、さまざまし尽くしたることどもあり(いろいろ手の込んだものが入っていました)。人目にことことしくは(薫大将殿は見た目で派手になるようなことは)、ことさらにしなしたまはず(気をつけて避けていらっしゃいました)。　*「にょうばうのおまへ」という言い方は珍しい。女房には普通、敬称の「御」は使わない。出産補助が女房連中の重要で神経質な労務だったとすれば、特に労う意味でもあるのだろうか。それとも、御家の特別行事であるお産の祝儀の形として女房用に引出物が用意されるので、その光景を語る丁寧語としての慣習的な語用に過ぎないのだろうか。それでも、なぜか私は言い換えに「御」を付ける気にならない。　*「ついがさねをば」の対象の限定を示す格助詞「をば」は、「さるものに」と当該対象に一定の評価が下され、接続助詞「て」と語られる構文に於いて、以下に続けてそれ以外の対象に言及する際の前提条件項を形成するので、対象である「衝重」に＜の方は＞という部分明示用語を補語する。　*「桧破籠(ひわりご)」は「桧破子」とも表記され＜ヒノキの白木の薄板で折り箱のように作り、中に仕切りを設け、かぶせ蓋(ぶた)にした容器。弁当箱として用いた。＞と大辞泉にある。

*七日の夜は、后の宮の御産養なれば(お七夜は皇后が催しなさる御出産祝だったので)、参りたまふ人びといと多かり(参列なさる人々はとても多かったのです)。*宮の大夫をはじめて(中宮職長官を初めとして)、殿上人(管理職)、上達部(高官)、数知らず参りたまへり(数知れず参列な

さいました)。　*「七日の夜」は「しちにちのよ」と読みがある。「七日」は「なぬか」との読みが以前に示されていたが、「なぬか」はそれ自体で特定の意味を持つ＜七日目＞を示す言い方のようで、この御七夜(おしちや、出産七日目の祝い)のことも「なぬか」という場合もあるらしい。だから、此処で３日・５日・７日・９日と連続して語る際に、「7 日」だけを特別に印象付ける言い方を避けて、「七日は(なぬかは)」ではなく「七日の夜は」という言い方にしたのかもしれない。しかし、「お七夜」は産養の中でも、今日でもその祝いが慣習として、とは言え家制度が崩れた現代の核家族社会では必ずしも有効性は高くないが、世間への御披露目の日としての目安くらいには残っているように、最も盛大で公的な意味が認識されていた主要な祝日だったようだから、是を「七日の夜」と言ってみても、特別な日という印象は生活感として読者にはあっただろう。　*「宮の大夫(みやのだいぶ)」は＜中宮職(ちゅうぐうしき、後宮用務官司)の長官。＞と古語辞典にある。

内裏にも聞こし召して(天皇も御孫の出産を聞き知りなさって)、

「宮のはじめて大人びたまふなるには(三の宮が初めて親にお成りになるとあっては)、いかでか(何で祝わずに居られようか)」

とのたまはせて(と仰せになり)、御佩刀(みはかし、御守刀を)奉らせたまへり(御子に贈り申しなさいました)。

九日も(ここぬかも、九日目の夜も)、大殿より仕うまつらせたまへり(義理筋ながら男方の親の立場で源氏右大臣からお祝いが催しなされました)。よろしからず思すあたりなれど(六条院の源氏大臣が二条院を祝うのは不本意でいらっしゃったが)、宮の思さむところあれば(婿宮がお喜びなのだからと)、御子の公達など*参りたまひて(御子息の貴人たちが大臣代の使者として参上なさったことで)、すべていと思ふことなげにめでたければ(権勢家から迫害を受ける恐れも無いように思えて、全てが順調そうで喜ばしく)、*御みづからも(母となった御方御自身も)、月ごろもの思はしく心地の悩ましきにつけても(この数ヶ月と不安な立場で体調の辛さもあって)、心細く思したりつるに(心細い気分だったが)、かくおもだたしく今めかしきことどもの多かれば(子を儲けてみれば、これほど祝福されて誇らしく晴れがましい事が多いので)、すこし慰みもやしたまふらむ(夫宮の他婚で傷付いた心も、少し慰められなさったようです)。　*「参りたまひて」の連続句用助詞「て」は、単に事象の経緯説明を示すのではなく、その「参りたまふ」ことで「思ふことなげにめでたし」と因果する論理説明を示す文意らしいので、「たまひて」は＜なさって(次に)＞ではなく＜なさったことによって(結果は)＞という言い方になる。　*「おおんみづからも」は注に＜中君をさす。＞とある。文意からして、それが最も尤もらしいが、流し読むと源氏大臣のようにも見えて、紛らわしく分かり難い。

大将殿は(薫大将殿は)、「かくさへ大人び果てたまふめれば(出産なさって親らしくお成りになれば)、いとどわが方ざまは気遠くやならむ(いっそう私への興味は失せるだろうな)。また、宮の御心ざしもいとおろかならじ(それに、夫宮の御愛情もまた深まるだろう)」と思ふは口惜しけれど(と思えば残念だが)、また、初めよりの心おきてを思ふには(一方で、初めから目論んだ妹君を匂宮に添わせて、自分は後見人として幸せを見守るという立場からは)、いとうれしくもあり(この御出産はとても喜ばしいのでした)。

［第三段　二月二十日過ぎ、女二の宮、薫に降嫁す］

かくて（そして）、*その月の二十日あまりにぞ（同じ二月の二十日過ぎには）、*藤壺の宮の御裳着の事ありて（藤壺にお住まいの女二の宮の御裳着の祝儀があって）、またの日なむ（その翌日には）、大将参りたまひける（薫大将が藤壺にお通いなさったのです）。　*「その月」は注に＜中君の出産と同じ二月二十日過ぎに。＞とある。対の御方の出産は、二月初旬の人事で薫君の権大納言権右大将昇進があった直後だった。そして、その特別昇進は女二の宮との婚儀が整ったことを受けての薫君の箔付けだったのだから、「かくて」が上文の記事内容を具体的に受けた＜かくして、こうして＞という言い方だとすれば、御方の出産記事は挿入文として飛ばして、八章一段の「如月の朔日ごろに～」という昇進記事から続く言い方のようにも見える。が、御方の、そして匂宮の御子誕生はそれ自体の出来事としても重要だし、薫君の周辺事情としても大きな意味を持つものなので、決してただの世間話ではない。だから、ここの「かくて」は出産事情も踏まえて、しかし其を理由・原因項とする文意ではなく、一般語用の＜そして＞という時系列叙述を言う接続詞と見るべきだろう。　*「藤壺の宮」は女二の宮のことらしい。確かに、一章二段に「御四十九日過ぐるままに忍びて参らせたてまつらせたまへり」とあって、帝が藤壺女御の亡き後は、飛香舎藤壺に女二の宮を住まわせてはいたらしいが、この呼称は初めてかと思う。

*夜のことは忍びたるさまなり（第一夜は宴席は無く、専ら男が女を抱くという秘め事に終止したのです）。*天の下響きて（宮廷内に噂は持ち切りで）、いつくしう見えつる御かしづきに（尊く思われる帝の御愛女に）、ただ人の*具したてまつりたまふぞ（このように臣下が男根を突き刺し申し上げなさるのを）、なほ飽かず心苦しく見ゆる（やはり勿体無く切ないと思うのです）。　*「夜（よ）」との一言があるだけだが、下に「三日の夜は」と語られるので、この「夜」は＜初夜・第一夜＞という言い方なのだろう。そして、この文に続いて「いつくしう見えつる御かしづき」と姫宮の処女性が語られるということは、この「忍びたるさま」という言い方で、その未通が薫殿によって散らされた、という文意を成す。で、言い換えでは、それを明示して置く。　*「あめのしたひびきて」は「夜のこと」に対する宮中の噂で、「なほ飽かず心苦しく見ゆる」に掛かる構文なので、此処で読点を打つべきだろう。　*「具す（ぐす）」は＜然るべき形が揃う・整う＞だから、「具したてまつりたまふ」は＜結婚相手を務めさせて頂き申しなさる＞とも言えるだろうが、「具す」は物質性・形態性を示す語感なので、薫殿は姫宮に実際にそういう形を成立させ申し上げることをした、と読んで置く。

「さる御許しはありながらも（そういう御意向があるにしても）、ただ今（今が今）、かく急がせたまふまじきことぞかし（このように床入りをお急ぎあそばさなくても良いでしょうに）」

と、そしらはしげに思ひのたまふ*人もありけれど（と非難がましく思い仰る御親族もいたが）、思し立ちぬること、すがすがしくおはします御心にて（帝は物事を御決断なさったら迷いなさらない御気性なので）、来し方*ためしなきまで（過去に例が無いことだとしても）、同じくはもてなさむと（決めた以上は左様に物事を進めようと）、思しおきつるなめり（お考えのようでした）。帝の御婿になる人は、昔も今も多かれど（帝の御婿になる人は昔も今も多く居るけれど）、かく盛りの御世に（このように全権ある御在位中に）、*ただ人のやうに（家事に追われる市井の者の様に娘の世話を焼いて）、婿取り急がせたまへるたぐひは（婿取りをお急ぎあそばす例は）、すくなくやありけむ（少ないのではないでしょうか）。　*「人」は帝を非難できる立場の人なのだから、近しい王族なのだろう。敬語遣いもある。　*「ためしなきまで」の「まで」は程度・限度をしめす副助詞ではないだろう。「ためしなし」という形容句は＜例がない＞という認識で、その連体形「ためしなき」は普通は＜例が無い事＞であり、是を＜例が無い程度＞と読むべき場合は比較対象と形容内容が近くに示されていなければならず、此処に左様な記事は無い。

なので、この「まで」は逆接の接続助詞「も」と同様の語用となる。この語用では多くの場合は「までも」という言い方になるようだが、「も」が＜しかし全体で見れば＞と同一事象に付いて視点を変えた別認識を示すのに対して、「まで」は特定事項の＜如何に関わらず変わらない＞という固定認識または意志を示すので、「も」の強調語用というだけではなく、判断基準に言及していると言えるのだろう。　*「ただうど」は権限がある「御門」に対しては＜臣下＞を意味するだろうが、此処の文筋では、帝に対比させた社会構造認識としてではなく、帝とは違って権限が無く＜日々の暮らしに追われる一般人の事情＞としての語用なのだろう。軽口なのだろうが、少なからず娘を自らお構いなさる帝への皮肉ではありそうだ。噂話をする宮廷女房の視線での語りなのだろう。

*右の大臣も（みぎのおとども、源氏右大臣も六条院の居間で一条宮奥方に）、　*当文の場面舞台は、六条院夏の町の源氏大臣と一条宮奥方との夫婦の部屋、ということらしい。それは以下の文の文意から知れる事なのだろうか。それとも、この「右の大臣も」という言い方で、舞台が御所から六条院に転換するという、その場面設定は十分に説明されているのだろうか。確かに、訳文と注釈から、当文の舞台が六条院夏の町であるらしいと私にも理解できたが、この「右の大臣も」という言い方で、その設定が読者に伝わらなければ、此処の語りは破綻している。だから、私には伝わって来ないので、とても理解できないし非常に不満だが、この「右の大臣も」という言い方で、当時の読者には此処の舞台設定が伝わったもの、として補語して置く。

「めづらしかりける人の御おぼえ、宿世なり（奇特なほどの大将殿の帝の御信任、運勢だ）。故院だに（父君の故六条院光君でさえ）、朱雀院の御末にならせたまひて（朱雀院が御晩年にお成りになって）、今はとやつしたまひし際にこそ（出家なされる間際に）、かの母宮を得たてまつりたまひしか（母君の入道宮を頂戴申しなさったのだから）。我はまして（私となると）、*人も許さぬものを拾ひたりしや（同じ朱雀院の御血筋とはいえ、世間が特には気にしない相手との結婚をわざわざしたようなもんですからねえ）」　*「人も許さぬものを」の「もの」は＜事情＞のことで、何も一条宮を＜日陰者＞と言っているのではないのだろうが、聞き様によっては＜誰も見向きもしない後家さん＞と言っているようだし、「拾ふ（ひろふ、選び取る）」という言い方はダメ押しのようでもある。是が当の一条宮に対しての発言だという事が、冗談を言い合える睦まじさの演出なのだろう。だから私などは、此処の言い回しで、此処の舞台が六条院らしいと分かったが、予め分かっていないと冗談と気付かず、全く笑えない。

とのたまひ出づれば（と仰り出すので）、*宮は（一条宮奥方は）、げにと思すに（御自分のことを尤もな話とお聞きになって）、恥づかしくて御いらへもえしたまはず（立場に気が引けてお応え申す事もお出来になれません）。　*「宮」は一条宮奥方のことらしい。しかし、此処までの文脈からして、また直前の舞台からの転換からして、如何してこの「宮」という言い方で＜一条宮奥方＞が特定できるのか。確かに文意からすれば、それが最も尤もらしいとは知れるが、是で普通に分かり易い語りになっているとは、私には到底理解できない。

三日の夜は（みかのよは、通い三日目の夜は内々の結婚祝宴なので）、*大蔵卿よりはじめて（大蔵卿を初めとして）、かの御方の心寄せになさせたまへる人びと（姫宮の御世話役に帝が就かせなさっていた人々や）、家司に仰せ言賜ひて（後宮管理官に帝が御指示あそばして）、忍びやかなれど（公式行事ではないので、当人たち以外に見知らないが）、かの御前（かのごぜん、婿殿の先払い役の者や）、随身（ずいじん、護衛官）、車副（くるまぞひ、牛車係）、舎人（とねり、雑用係）まで禄賜はす（にまで引出物をお与えなさいます）。そのほどの事どもは（その時の次第は）、*私事のやうにぞありける（帝が王家の尊大さを振りかざしなさらないので、市井の婚儀のように近し

い者たちだけがしみじみとお喜び申し上げました)。　*「大蔵卿(おほくらきゃう)」は＜大蔵省(おほくらのつかさ)の長官＞で、一章二段に「御母方とても、後見と頼ませたまふべき、叔父などやうのはかばかしき人もなし。わづかに大蔵卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹なりける。」とあって、藤壺宮の母方の叔父の中では出世頭らしい。ただ、当時の大蔵省は財宝庫の管理業務で、予算の立案執行は政務官である弁官以上が参議以上の政治家の意向を受けて取り計らったようなので、そこに審査権限を持つような現在の圧倒的な支配力があったわけではなく、それなりに権威はあったのだろうが、大臣家の子息としては大蔵卿は封御された処遇だったのだろう。尤も、財貨の宝物庫からの取り出しには大蔵省の承認が必要なので、その財務管理情報の掌握は実際の政治行政に大きな影響力がある事は間違いない。しかし、経済の基調が今から見れば変化の遅い農耕社会であってみれば、そのダイナミズムは特異な事件に左右されるほど限定的なものだった可能性が高く、その総合的な情報掌握も然して特別高度な計算処理能力を要さなかったのかも知れず、管理官資格者の常識の範疇に収まるものだったのだろう。　*「わたくしごと」は＜社会的な格式を持った公式のものではない個人の事柄＞だが、天皇は公人なので、その個人的なことにも作法が決まっている。だから、此処でいう「私事」は全ての王家作法から外れて＜一般人の作法を取る＝臣下同士の婚儀＞という意味のように見える。が、臣下と言っても、薫君は特別な貴家の貴人であり、何を以て普通の結婚式というのか、私には全く分からない。ただ、上文が身分の低い従者にも手厚く処遇したような記事だったので、形式張らない親身な祝会だったような印象で言い換えてみるが、全く以て捉え所のない難文で、言い換え文に確からしい手応えが無く、困り果てる。

かくて後は(その後も薫殿は)、忍び忍びに参りたまふ(藤壺に忍び通いなさいますが)、心の内には、なほ忘れがたきいにしへざまのみおぼえて(心中には未だ忘れ難い故宇治姉君のことばかりが思われて)、昼は里に起き臥し眺め暮らして(昼は三条宮邸に寝ても覚めても呆然と庭を眺め暮らして)、暮るれば*心より外に急ぎ参りたまふをも(日暮れると気が進まぬままに身支度して参内なさるのも)、ならはぬ心地に(通い婚に馴れていない所為か)、いともの憂く苦しくて(とても面倒でならないので)、「まかでさせたてまつらむ(三条宮邸に御迎えの準備を整え申して、藤壺宮に此方に出て来て頂き申そう)」とぞ思しおきてける(とのように決心なさったのです)。　*「心より外に」は＜気乗りしないものの＞で、薫殿がそう思っているのだから仕方が無い話だろうし、この物語の主人公は薫殿だとは思うが、藤壺宮の様子がほとんど語られず、内親王だというのに軽く扱われている印象は少なからずある。延いては天皇軽視にもなるような、何処か違和感も覚えるが、言い出せば、光君に対して朱雀帝が凡庸であるかに語られていた本編と同様の執筆姿勢が見られて、その生き生きとした生態描写はむしろ新鮮だ。が、実際の帝位は朱雀帝が襲ったのであり、その御子が今上帝だという事情は、恐らくこの物語のこうした語りっぷりの筆致以上に重いだろう。

母宮は(薫殿の母君の入道宮は)、いとうれしきことに思したり(姪に当たる姫宮がお越し下さることを、とても嬉しいことにお思いになって)、おはします寝殿譲りきこゆべくのたまへど(御自身がお住まいの寝殿を若夫婦にお譲り申したいと仰せになるが)、

「いとかたじけなからむ(母宮を余所へ追い遣っては、あまりに畏れ多い)」

とて(と言って薫殿は)、*御念誦堂のあはひに、廊を続けて造らせたまふ(寝殿と御念誦堂との間を廊下で繋げるように造らせなさいます)。西面に移ろひたまふべきなめり(母宮には寝殿の西面にお移り頂く為のようです)。　*「おおんねんずだうのあはひに～」については、注に＜西面の続きに念誦堂があり、その間に渡廊を造る。＞とある。そして、薫殿がそうしたのは「西面に移ろひたまふべきなめり(母宮に

寝殿西面に移り住んで貰う為らしい)」と語られる。ということは、入道宮が「寝殿譲りきこゆべし」と仰ったのは＜自分は念誦堂に住まう＞という意味だったことになる、のだろう。そして、薫殿はそれでは忍びないと、せめて寝所は御堂の僧房では無しに、寝殿をお使い下さいと廊下で繋げた、のだろう。本当に、フザケルナ！と怒鳴りたいほど分かり難い文が続く。仲間内符牒は大概にして貰いたい。

東の対どもなども(薫殿自身の住まいである東の対や、その他の付属の建物なども)、焼けて後、うるはしく新しくあらまほしきを(焼けた後に立派に新しく申し分なく再建されていたが)、いよいよ磨き添へつつ(それらを更に掃除整頓して)、こまかにしつらはせたまふ(新婦社中御一行を迎え入れる為に、丁寧に部屋割り準備をなさいます)。

かかる*御心づかひを(こうした三条宮邸の御意向を)、内裏にも聞かせたまひて(天皇も聞き知りあそばして)、ほどなく*うちとけ移ろひたまはむを(結婚して間も無く姫宮が他家に気安くお移りなさるのを)、いかがと思したり(失礼があっては感心しないと懸念にお思いになりました)。帝と聞こゆれど(権威ある御旗と申し上げても)、心の闇は同じごとなむおはしましける(子の自立を信じない親の盲目ぶりは皆と同じなのでいらっしゃいました)。　*「御心づかひ」は「みこころづかひ」とローマ字読みがある。「御」が＜おおん＞ではないのも相変わらず分からないが、この「御」は薫殿に対する敬称なのかどうかも、今一つ分からない。どうも、入道宮に対する敬意が感じられるので＜三条宮邸＞として置く。*「打ち解く」は良く言えば＜慣れ親しむ＞だが、悪く言えば＜緊張を解く＝だらしなくなる＞で、此処では帝が親心で心配しているのだから＜だらしない＝子供っぽく甘える＝失礼する＞という懸念なのだろう。因みに、藤壺宮 16 歳、薫殿 27 歳、今上帝 48 歳、入道宮 48 歳、というところ。

母宮の御もとに、御使ありける御文にも(姫宮の主人女となる、御自身の異腹妹である、薫殿の母宮の御もとに御使者が遣わされた天皇の御手紙にも)、ただ*このことをなむ聞こえさせたまひける(ただ娘の至らなさを案じ善処を乞う旨を願い申しあそばされていました)。　*「このこと」とは、姫宮の「打ち解け」を「いかが」かと案じなさる天皇の御気持ち、なのだろう。

*故朱雀院の(天皇の父君であった亡き朱雀院が)、取り分きて(特に)、この尼宮の御事をば聞こえ置かせたまひしかば(この入道母宮の御面倒をお頼み申し置かれなさっていたので)、かく世を背きたまへれど(このように母宮は出家なさっていらっしゃったが)、衰へず(二品内親王の御待遇扶持を減額せず)、何事も元のままにて(何事も昔と変わらず)、奏せさせたまふことなどは(この妹宮が願い申しなさることは)、かならず聞こしめし入れ(全てお聞き入れなさって)、御用意深かりけり(天皇のお気遣いは格別なのでした)。　*「故朱雀院」と朱雀院が故人である事が明示されたのは、恐らく是が初めてかと思う。朱雀院が故人であろうことは、それも光君より先に亡くなっているだろうとは予想はしていた。が、何故か、この非常に重要な事情は未だに語られておらず、此処に初めて故人であることは明かされたが、今だに何時崩御されたかは不明で、光君の先か後かも分からない。尤も、光君の逝去についても詳しくは語られていないが。

かく、やむごとなき御心どもに(かくも尊い天皇と母宮の御思い遣りに)、かたみに限りもなくもてかしづき騒がれたまふおもだたしさも(双方からこの上なく大事にされ処遇されなさる誇らしさも)、いかなるにかあらむ(どうということもなく)、心の内にはことにうれしくもおぼえず(内心ではこの恵まれた結婚を特に嬉しくも思わず)、なほ、ともすればうち眺めつつ(今も尚、

ともすれば物思いに沈んで)、宇治の寺造ることを急がせたまふ(薫殿は宇治の山寺に弔い堂の造営を急がせなさいます)。

[第四段　中君の男御子、五十日の祝い]

*宮の若君の*五十日になりたまふ日数へ取りて(また薫殿は、兵部卿宮の若君が五十日の祝いにお成りになる日を数えて)、その餅の急ぎを心に入れて(その祝餅の飾り付けに熱心で)、籠物(こもの、当日の供え菓子類や)、桧破籠(ひわりご、折詰料理)などまで見入れたまひつつ(などまで趣向を凝らしなさっては)、世の常のなべてにはあらずと思し心ざして(平凡なものではつまらないと思い目指しなさって)、沈(ぢん、重い香木)、紫檀(したん、硬い細工用木材)、銀(しろかね)、黄金(こがね)など、道々の細工どもいと多く召しさぶらはせたまへば(それぞれ専門の細工職人たちをとても大勢召し寄せなさったので)、我劣らじと(皆競い合って)、さまざまのことどもをし出づめり(様々優れた調度飾りを作り出しました)。　*「みや」は「若君の五十日になりたまふ日数へ取りて」とあるから、是が匂兵部卿宮だと知れるが、上文からの流れでは＜母宮＞か＜藤壺宮＞に見えて非常に紛らわしい。主語は同じ薫大将殿だとしても、話題が変わり、その視点や意識の方向性の転換を示すには、対象の固有名詞を挙げるのが非常に有効に思えるが、何故この作者は其をしないのか。私には全く分からない。それに、是は此処に限らないが、話題を変える際に＜そして、さて、時に＞などの前置句で、その意図を明示するのが現代語の普通の語法かと思うが、この物語にはそういう語法が非常に少なく、此処でも無い。私としては、このままでは語調が悪いので、勝手に＜また＞という接続詞を補語した。　*「五十日」は「いか」と読みがある。「いか」は「五十日の祝ひ(いかのいはひ)」のことで、大辞泉には＜子供が生まれて 50 日目に行った祝い。父や外祖父などが箸を取って、赤子の口に餅(もち)を含ませる。平安時代に、主として貴族の間で行われた。いか。＞とある。「お食い初め」だろうか。今の「お食い初め」は乳歯が生えて離乳食が始まる「百日(ももか)」あたりのことを言うらしいが、「五十日」で＜赤子の口に餅を含ませる＞のも形だけの事だから、赤ちゃんの順調な成長が見られるのを祝い願う気持に変わりはないだろう。生後五十日ぐらいになると、まだ不十分とは言え、首のすわりや目の動きがだいぶしっかりしてくるから、お披露目の意味は十分にありそうだ。

*みづからも(薫大将はご自身でも)、例の、宮のおはしまさぬ隙に*おはしたり(例によって匂宮がいらっしゃらない隙に祝宴会場式場の様子を窺いに二条院にお見えになりました)。　*「みづからも」の追加意の係助詞「も」は、上文の五十日祝宴に向けて準備を進めるという話題に於いての、薫殿自身の行動を説明する言い方、と取って左様明示補語して置く。ただ、薫殿が祝宴の準備に熱心なのは、御方への関心の高さからだという事は基調説明されているので、この「みづからも」はそういう尤もらしい理由付けに託けて、薫殿は御方に近付いた、という文意にはなるのだろう。　*「おはす」は＜いらっしゃる＞で、是が薫殿目線の＜お出向きなさる＞なのか、御方目線の＜お見えになる＞なのかは自明ではない。が、「たり」の客観表現から、事態を受け止める御方目線を感じる事がこの文では大事そうだ。

心のなしにやあらむ(大将殿は御昇進の上に内親王と御結婚なさり、気の所為か)、今すこし*重々しくやむごとなげなるけしきさへ添ひにけりと見ゆ(以前よりは少し重々しく王族の尊厳さえ加わったように見えます)。　*「重々し」は権大納言兼右大将への昇進。「やむごとなし」は内親王との結婚、を指すのだろう。

「今は、さりとも(もう以前とは違って)、むつかしかりしすずろごとなどは紛れたまひにたらむ(厄介な言い寄りなどは言い紛らしなさらないだろう)」と思ふに(と御方は思って)、心やすくて、対面したまへり(安心して対面なさいました)。されど(しかし薫殿は)、ありしながらのけしきに(相変わらずの口説き口調で)、まづ涙ぐみて(直ぐに涙ぐんで)、

「心にもあらぬまじらひ(望みもしない結婚は)、いと思ひの外なるものにこそと(本当に面倒なものだと)、*世を思ひたまへ乱るることなむ(今度の結婚を思い悩みまして)、まさりにたる(実感致します)」　*「世」は＜自分の身の上事情＝この結婚＞という言い方なのだろう。この時の薫殿の意識としては、この結婚が＜内親王を頂いた＞という社会的な畏れ多さではなくて、単に伯父子の＜従兄妹と一緒になった＞という身内事情の親しさがあったようだ。現にそういう血縁だし、そういう身内意識の育ち方をして来たのだから、薫殿自身にとっては普通の認識なのだろうが、勿論、とんでもない天皇家への不遜だ。が、天皇自身も含めて、雲上にいる限りは、雲を下から仰ぎ見ることは絶対に出来ない。天皇が尊大に振舞うのは、王家の権威形成過程によって定まった王家と臣下との規範諸作法様式であって、それは社会秩序を成すので犯すべからざるものだが、没落王家で地上にいた宇治姫と雲上人の薫殿が接するこうした水際では、その視点のズレは決定的だ。

と、*あいだちなくぞ愁へたまふ(と公人の自覚も忘れて訴えなさいます)。　*「あいだちなし」は＜無分別だ、無作法だ＞みたいな語用が多いらしいが、「あ」が強調接頭語で「いだち」が「出だし立つ(いだしたつ、準備して事に当たる)」の短略に私には聞こえるので、その語感で勝手に＜非常に準備不足→立場の自覚がない＞と考えてみた。

「いとあさましき御ことかな(何と勿体無い仰せでしょう)。人もこそおのづからほのかにも漏り聞きはべれ(そういうことを仰っていると、誰かがいつかそういう気配を聞きつけ申します)」

などはのたまへど(などと御方はご注意申し上げなさるが)、かばかりめでたげなることどもにも慰まず(これほどの栄誉に浴しても心が晴れず)、「忘れがたく思ひたまふらむ心深さよ(忘れ難くお思いのような故姉君への思いの深さだ)」とあはれに思ひきこえたまふに(と薫殿に同情申しなさって)、*おろかにもあらず思ひ知られたまふ(何処か報われる誇らしさを思い知りなさいます)。　*「おろかにもあらず」は＜粗略ではない→丁重に敬われた誇らしさ＞で、是を薫殿の故姉君への思いが＜本気だった＞という文意に取ることは出来るだろうが、それは既に「心深さよ」に示されているようにも見える。で、穿ち過ぎの嫌いはあるが、この薫殿の恋情を、八宮の娘である宇治姫が朱雀院の孫娘である藤壺宮に勝った、という意味に取って見ると、八宮と朱雀院の弟兄は歳が離れているし、母も違うので身近に育たなかっただろうから、個人的な確執があったとは思えないが、八宮の後見筋が朱雀帝代に謀反を企てたらしく、それで失脚したらしいので、朱雀帝派の失政を結果的に救ったかに語られる光君筋の、それも実は朱雀院娘と大宮藤原筋を引き継ぐ薫殿に認められるという内実での逆転によって、その怨念の一端が晴らされた、みたいな、いかにも女房が好みそうな執念深い文意も、この「思い知る」に込められているように聞こえる。

「おはせましかば(生きていらっしゃったなら)」と、口惜しく思ひ出できこえたまへど(と御方は残念に故姉君を思い出し申しなさるが)、「それも(しかしそれも)、わがありさまのやうに(私が匂宮の別婚で悩むように、姉君も大将殿の別婚で悩みなさって)、*うらやみなく身を恨むべかりけるかし(私たち姉妹は互いに相手を羨むことも無く、自分の境遇を恨む運命なのだろう)。何事も*数ならでは(何事も後ろ盾のない没落家の出身では)、世の人めかしきこともあるまじかり

けり(一人前の貴族の扱いを受ける訳が無い)」とおぼゆるにぞ(と思われるので)、いとど(いっそう)、*かの(あの亡き姉君の)、うちとけ果てでやみなむと思ひたまへりし心おきては(薫殿のような貴人の結婚申し込みは受けずじまいにしようとお考えになった心構えは正しかったと)、なほ(今さらに)、いと重々しく思ひ出でられたまふ(とても重々しく思い出されなさいます)。 *「うらやみなく身を恨むべかりけるかし」は敬語遣いが無いので、主語は故姉君では無く、と言って「べし」の推量があるので、御方自身の事情だけでもなく、自分たち＜宇治姉妹＞についてのことらしい。心中文ならではの主語・目的語の省略および論旨飛躍がある、ということだろうか、難文だ。分かり易いかと、「かたみに(互いに)」を補語する。 *「数ならでは」は＜ものの数に入らない立場では＝没落家の出身では＞。 *「かの」は注に＜姉大君をさす。最後まで身を許さずに、の意。＞とある。この文は語りの語調としては分かったような気もするが、実は文意は取り難い。この「かの」は構文としては「心おきて」に掛かって、「うちとけ果てでやみなむと思ひたまへりし」は説明の挿入句だ。そして、「心おきては」の係助詞「は」を受ける修辞述文は省かれている。「心おきて」が「いと重々し」というのは、語感では分かるが、構文上は「いとど」を受ける形容修辞があって、それが「なほいと重々し」と語られなければ変だ。だから、「心おきては」の下には＜正しかりしを＞くらいが暗意されている、と読んで置く。

［第五段　薫、中君の若君を見る］

若君を切にゆかしがりきこえたまへば(薫大将が若君をどうしても拝見したいと申しなさるので)、恥づかしけれど(他家の殿方に赤子をお見せ申すのは裸の分身を見せるようで、気が引けたが)、「何かは隔て顔にもあらむ(御世話頂いている大将殿に、どうして他人行儀な真似が出来ようか)、わりなきこと一つにつけて恨みらるるよりほかには(妙な横恋慕を拒む一点に於いて恨まれる以外には)、いかでこの人の御心に違はじ(せいぜいこの人のご希望には添いたい)」と思へば(と御方は思うので)、みづからはともかくもいらへきこえたまはで(自分からあれこれと予断を与え申しなさらずに)、乳母してさし出でさせたまへり(乳母に抱かせて御簾の外に若君を差し出させなさいました)。

さらなることなれば(匂宮と御方の御子であってみれば、当然の事ながら)、憎げならむやは(どうして醜い事がありましょう)。ゆゆしきまで白くうつくしくて(若君は不吉なほど白く可愛らしく)、たかやかに物語し(大きな声を出して)、うち笑ひなどしたまふ顔を見るに(笑っていらっしゃる顔を見ると)、わがものにて見まほしくうらやましきも(薫大将が自分の子だったらと羨ましく思うのも)、世の思ひ離れがたくなりぬるにやあらむ(現世への未練を起こさせるものだったかもしれません)。

されど(とは言え)、「言ふかひなくなりたまひにし人の(亡くなった宇治姉君が)、世の常のありさまにて(結婚した当然の結果として)、かやうならむ人をもとどめ置きたまへらましかば(このような若君を残して置いてくださったなら)」とのみおぼえて(と思うばかりで)、このころおもだたしげなる御あたりに(世に羨ましがられる新妻の御腹に)、いつしかなどは思ひ寄られぬこそ(早く子を儲けたいなどとは思い寄らないとは)、あまりすべなき君の御心なめれ(全く困った夫としての自覚の無さというものでしょう)。

かく女々しくねぢけて(大将殿をこのようにいじいじしたひねくれ者として)、まねびなすこそいとほしけれ(お話し申すのも心苦しいが)、しか悪ろびかたほならむ人を(これほど性格が悪く

出来の悪い人を)、帝の取り分き切に近づけて(天皇が特に側に置いて)、睦びたまふべきにもあらじものを(親しくなさるはずもないので)、「*まことしき方ざまの御心おきてなどこそは(実際に藤壺宮を持成す大将殿の女扱いは)、めやすくものしたまひけめ(上手になさっているに違いない)」とぞ推し量るべき(とは推察できます)。　*「まことしき方ざま」は＜実際の事情＞で、薫殿は結婚観や人生観に於いては世を儚む姿勢を見せつつも、その実、相当な女垂らしであったことは匂兵部卿巻二章五段に端的に語られていた。

げに(実に)、いとかく幼きほどを見せたまへるもあはれなれば(これほどの幼子を親しくお見せ下さる御方の好意も有難かったので)、例よりは物語などこまやかに聞こえたまふほどに(薫殿はいつもよりいろいろな話を親身に申しなさっているうちに)、暮れぬれば(日が暮れたので)、心やすく夜をだに更かすまじきを(気軽に他家で夜更かしできない妻帯者なので)、苦しうおぼゆれば(不自由なことと)、嘆く嘆く出でたまひぬ(残念そうにしてお帰りなさいます)。

「をかしの人の御匂ひや(うっとりする殿の匂いだわ)。*折りつれば、とかや言ふやうに(香り高い梅の枝を折れば、とか古歌で言うように)、鶯も尋ね来ぬべかめり(浮気な鳥も寄って来そうね)」　*「をりつれば」は注に＜『源氏釈』は「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯の鳴く」（古今集春上、三二、読人しらず）を指摘。＞とある。

など、わづらはしがる若き人もあり(などと薫殿を困り者の様に言って、囃し立てる若女房もいました)。

[第六段　藤壺にて藤の花の宴催される]

「夏にならば(夏になると)、三条の宮*塞がる方になりぬべし(三条宮邸が方塞がりに当たってしまう)」と定めて(と陰陽道で計算されたので)、四月朔日ごろ(うづきついたちごろ、四月初旬の)、節分とかいふことまだしき先に(立夏になる前の内に)、渡したてまつりたまふ(薫大将は藤壺宮にお移り頂き申しなさいます)。　*「ふたがるかた」は＜通行止めにする方角＞で、此処では＜御所から見て出向いてはいけない方角＞のことらしく、それは「方塞がり(かたふたがり)」というものらしいことは、帚木巻三章で光君が三条藤原邸から外出する口実に是を使っていたことから覚えがある。陰陽道の暦占いの一つで、実際に尊重されていたらしいが、どういう根拠があったのか、どういう実効性があったのか、など私には分からないが、何か物事を決める手掛かりとして、ジャンケンに似たくじ引き要素があって、深刻なしこりを残さない方便にされた、という面はありそうだ。同じ目的地が、一度別の方角に寄って、其処を基点とすれば忌門にならない、という「方違へ」はほとんど遊戯に見える。

明日とての日(その日を明日に控えた日に)、藤壺に主上渡らせたまひて(藤壺飛香舎にお上がお越しなさって)、藤の花の宴せさせたまふ(藤のお花見宴会を催しなさいます)。*南の廂の御簾上げて(南面の階上の間が開け放たれ)、椅子立てたり(玉座が設けられました)。公わざにて(おほやけわざにて、公式の朝廷行事で)、主人の宮の(あるじのみやの、母屋をお使いの女二の宮が)仕うまつりたまふにはあらず(催しなさる内輪の後宮行事ではなく)、上達部、殿上人の*饗など(上達部、殿上人の為の酒食は)、*内蔵寮より仕うまつれり(内蔵寮から各地の名産品が振舞われました)。　*「みなみのひさしのみすあげていしたてたり」ということは、飛香舎の南側に藤の花が植えられた坪

庭があって、その坪庭に面して正面階段があり、その段上の間に天皇が南向きに椅子(いし、玉座)に座して、御前の縁側に高官たちが控え、階下に上級役人が控える、という設営らしい。　*「饗(きゃう)」は＜酒食を備えてもてなすこと＞と古語辞典にある。　*「内蔵寮(くらづかさ、くられう)」は宮中で消費する各地の名産品を貯蔵していた管理所および管理人のこと、らしい。

右の大臣(源氏右大臣)、*按察使大納言(藤原大納言)、*藤中納言(藤原右家中納言)、*左兵衛督(藤原右家左兵衛督)、親王たちは(および親王たちでは)、*三の宮、*常陸宮など*さぶらひたまふ(三の宮や常陸宮が濡れ縁に控えなさいます)。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり(階下の南庭の藤の花の下に主だった上級役人の席は設けられてありました)。　*「あぜちのだいなごん」は注に＜紅梅大納言。故柏木の弟。＞とある。　*「とうちゅうなごん」は注に＜鬚黒と先妻の間の長男。＞とある。この説明の根拠は竹河巻二章一段の「睦月の朔日ころ(むつきのついたちころ、一月上旬の好日に)、尚侍の君の御兄弟の大納言(玉鬘殿の弟血筋の藤大納言)、「高砂」謡ひしよ(この人は昔に光君の前で高砂を謡った童子だった人だが)、藤中納言(それに藤中納言)、故大殿の太郎(この人は故右家殿の長男で)、真木柱の一つ腹など参りたまへり(真木柱と同腹の弟という人たちなどが玉鬘邸に年賀に参上なさいました)。」に拠るのだろうか。しかし当該記事は、薫殿が 16 歳の侍従君だった時の事と目されるもので、今からは 11 年前ほど前の話になる。いや、10 年以上地位が変わらなくても然して不都合では無い。ただ、竹河巻に於いては、その五章一段で、薫君が宰相中将から中納言に昇進した際、是は椎本巻他などの記述からして薫君が 23 歳の時だろうと思われるが、同時期の人事異動で源氏右大臣が左大臣に、藤原大納言が右大臣兼左大将に昇進したとあり、この源氏殿と藤原殿の昇進は竹河巻以外の記事と符合しないので、竹河巻作者の誤認と見做しても、竹河巻の極端な独自性からしても続編全体を大混乱はさせないかも知れないが、此処での人物特定を竹河巻の記事に準拠するなら、その部分的な符合は改めて竹河巻の雄弁性を再認識させる。が同時に、薫殿が今や権大納言兼右大将にまで昇進した一方で、源氏殿以下の面々にほとんど異動が無いということには、やはり幾分かの不自然さは覚える。とはいえ、本文以外の設定など一読者に出来よう筈も無いので、此処の場面に書かれて有る通りに舞台を想像するとして、その理解の為に、登場人物のそれぞれの年回りくらいは目安を付けて、それらしい恰幅を思い描いて見たい。厳密には難しいところもあるが、薫大将が 27 歳として、おおよそ源氏右大臣 53 歳、藤原大納言 59 歳、藤原中納言 47 歳、左兵衛督 37 歳、三の宮匂兵部卿 28 歳、常陸宮 26 歳、そして今上帝 48 歳、姿は見せないだろうが藤壺宮 16 歳、というあたり。　*「さひゃうゑのかみ」は注に＜藤中納言の弟、三男。＞とある。ということは、故藤原右家大臣と玉鬘殿との間での長子だろうから、竹河巻五章四段時点では右兵衛督と語られていた人物のことと思われるが、それが 11 年前の事で今は左兵衛督になっているということだろうか。この異動は何処かに語られているのだろうか。今現在の私には確認出来ないが、否定する根拠も無いので、一先ずは＜注＞を信じる。で、竹河巻二章五段での玉鬘腹の御子の年齢明示と若菜上巻などの記事との突合せで、この故藤原殿の三男は薫殿の 10 歳年上と目されるので、上項の年齢考察で左様に計算した。ところで、藤原右家大臣の子息たちは父君が亡くなってしまったので、出世が滞ってしまったようだが、この右家大臣は光君の最大の脅威となる存在だった。光君は養女の玉鬘を介して、この右家殿を婿に取り込んだが、実は藤原右家は朱雀帝の後見筋であり、今上帝も朱雀院の御子であってみれば、明石姫を中宮に押し込んだのは、外形的には光君は右家勢力に取り入っていたのである。光君の元々の寄って立つ勢力は藤原左家であり、藤原家左右勢力の均衡の上に王族権威で優位に立っていた光君は、経済世情の拡大で均衡点が崩れるか、世情縮小で勢力対立が統一されるか、する間の危うい存在であり、双方に恨まれない舵取りは薄氷を踏む繊細な神経を要求され続けていたのだろう。光君はそれを上手く乗り切り、跡継ぎの源氏大臣は右家大臣の早世によって、想定以上に優位な地位に今は居るのかも知れず、何れ荘園領主や受領たちを実力で従える藤原家のような磐石な基盤を持たない身であってみれば、尤も、藤原氏も平氏や武家源氏に早晩襲われるが、それは後世から見た事情であって、当時の情勢判断で

は有り得ないのだから、藤原氏の左右勢力情勢を受身で窺う外は無かった意外と臆病な立場であり、その自覚がこの人の人格を形成したような気がしないでも無い。しかし、そういう立場の独自性を自覚しなければ、源氏殿は容易に藤原左家の一部に取り込まれてしまい、自らが摂関家を狙う立場ではなく、左家が摂関家を狙う為の補完機能を担うに留まるのであり、その攻防が源氏殿と舅の左家大臣との確執の本質的な意味だったかと思う。そして光君は、それを見越して、源氏殿に若年からの低い身分での学生生活を指導した、のかも知れない。いや是は、ずいぶん雑感が過ぎたが、物語にはあまり書かれていない藤原右家の実力は実相では厳然としてあって、当時の読者はその実相を背景として、この話を読んでいたように思えるので、私は敢えて意識して置きたい。　*「三の宮」は匂兵部卿宮。　*「ひたちのみや」は注に＜今上帝の四宮。＞とある。匂兵部卿巻二章七段に「四の親王、常陸宮と聞こゆる、更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣りたまへり」とあって、更衣腹らしい。が、常陸宮を襲うのだから、更衣とは言え、相当に有力な実家だったのだろう。いや、有力と言うよりはむしろ権威筋で、王族血筋なのかもしれない。ただ、年齢明示は無いように思うが、匂宮巻の記事が四年前の事で、薫殿や匂宮と年齢が近そうな印象なので、ざっと匂宮の二歳下と踏んで置く。　*「さぶらひたまふ」は＜帝のお側に侍りなさる＞のだから、段上の＜縁側に居並びなすった＞のだろう。

*後涼殿の東に（帝は後涼殿北面の東縁側に）、*楽所の人びと召して（近衛楽隊を動員させ為さって）、暮れ行くほどに（夕方から）、*双調に吹きて（明るい曲が奏されると）、*上の御遊びに（階上の貴人たちの御演奏用に）、宮の御方より（藤壺宮の御部屋の用具から）、御琴ども笛など出ださせたまへば（女房をして弦楽器類や横笛などを出させなさったので）、大臣をはじめたてまつりて（源大臣を初めに申し上げて）、御前に取りつつ参りたまふ（以下の方々もそれぞれ楽器を手にとって演奏なさいます）。　*「こうらうでんのひんがし」は後涼殿の北面縁側ないし廊下の東側なのだろう。飛香舎は後涼殿の北側に配置し、飛香舎の南庭とは即ち藤壺は後涼殿の北裏側に面している。飛香舎南正面から見て、後涼殿北面は大向かうに当たる。　*「楽所（がくそ）」は内裏の北門側にあった倉庫兼雑用所だろうと思われる桂芳坊（けいほうぼう）という場所で蔵人舎人が器楽演奏の稽古をした組織、みたいなことがこの物語の何処かで述べられていたような気がするが、良く分からないし、辞書にも適格な説明が見当たらない。が、こういう場面で登場するのだから、とにかく帝側近の蔵人楽団、恐らく近衛楽隊みたいなもの、なのだろう。　*「双調（そうでう）」は洋楽のG音に近い中国古音名らしいが、此処では曲調を言っているのだろうし、「雅楽的音楽研究書」サイトの説明に明るい曲調とあるし、ユーチューブにアップされた雅音会の演奏動画も明るい曲調なので、藤花の宴に似合う相応しさからしても＜明るい曲＞という言い方にしたい。　*「うへのおおんあそびに」は、その具体描写が大臣他がそれぞれ楽器を手にして演奏なさったと語られるので、この「上」は＜階上の貴人たち＞を言っているようだ。

故六条の院の御手づから書きたまひて（故六条院が御自分でお書きになって）、入道の宮にたてまつらせたまひし*琴の譜二巻（入道宮に差し上げなさった古琴の楽譜の二巻を）、五葉の枝に付けたるを（五葉の松の枝に飾り付けて用意してあったものを）、大臣取りたまひて*奏したまふ（源大臣は手に取りなさって、藤壺宮のお別れ音楽会に相応しい三条宮邸の珍しい話題として、帝にお見せ申し上げなさり）、*次々に（それに続けて、帝にお披露目申し上げなさる三条宮邸の楽器の）、箏の御琴、琵琶、和琴など、*朱雀院の物どもなりけり（箏の御琴、琵琶、和琴などは、入道宮が譲り受けなさった故朱雀院の御遺品なのでした）。　*「琴の譜二巻」は「きんのふふたまき」と読みがある。古琴の楽譜で筆記例の紹介サイトもあったかと思うが、音符は特殊な漢字様のタブ譜式の記号で、一文字で一音をどの絃の何処の位置をどの左手指で指盤し、どの右手指でどのくらいの強さでどのくらいの時間鳴らすか、を示すもの、らしい。　*「奏したまふ」は＜帝に献上申し上げなさった＞のかもしれないが、「五葉の枝に付けたる」はこの日の音楽会の知らせを受けた源大臣が面白い趣向として用意した演出であり、帝も古琴を嗜むかも知れない

が、差し当たっては、帝がその曲を弾くことに興味を持つかどうかは別にして、藤壺宮の嫁ぎ先である三条宮邸の秘話として、その家柄の情緒の一端をお知らせ申した、という文意なのだろう。　*「つぎつぎに」は「大臣取りたまひて奏したまふ」を受けた言い方で、この「つぎつぎ」は名詞であり、「奏したまふ」は「大臣取りたまひて」を受ければ終止形語用に見えるが、同時に「次々」に掛かる連体形語用でもあり、構文校訂は「大臣取りたまひて」で読点とし、「奏したまふ次々に」とした方が、文全体の文意に適うのかも知れない。それでも、「奏したまふ」は前後に複意語用され、「次々に」は下に＜ある＞が省語されていて、格助詞「に」に「つぎつぎ」の副詞語用を洒落ている凝った言い回しである事に違いは無く、それが私にとっては面白さよりも分かり難さに思えるのも実感だ。　*「朱雀院の物どもなりけり」は注に＜朱雀院から女三宮に伝えらた楽器。＞とある。そして、この文で結ばれるから、此処の文意が全体で帝に三条宮邸の由緒を示す、と言っても、帝自身が入道宮を特に妹宮と意識していることは先に明示されてもいるが、その帝の思いに十分応え得るに足る宮邸である事を由緒ある物品をして証明することで、娘を送り出す帝の親心を慰め申そうという、源氏大臣の配慮らしいと知れるのである。まぁ、内輪事ならぬ公式の場であってみれば、傍目には源氏大臣が六条院を引き継いでいる自分の立場を誇示していると見えなくもないだろうが、藤壺宮が御所を去る前日の宴であれば、其処まで皮肉な見方をする者は居なかっただろうと思って置く。

*笛は（また大臣が用意なさった笛は）、かの夢に伝へしいにしへの形見のを（故藤原衛門督が夢見に立って遺児に伝えたいと託された形見の品だが）、「またなき物の音なり（二つとない名器だ）」と賞でさせたまひければ（と天皇がお褒めあそばしていらしたので）、「この折のきよらより、またはいつかは映え映えしきついでのあらむ（この度の目出度さを置いて、他にこれ以上の相応しい機会はない）」と思して、*取う出でたまへるなめり（とお思いになって、薫殿に譲りなさることになさったもののようです）。　*「笛はかの夢に伝へしいにしへの形見」は注に＜落葉宮から夕霧に伝えられた柏木遺愛の横笛。夕霧の夢に柏木が現れ遺児薫に伝えたいといったもの。＞とある。　*「取り出づ」は＜取り出す＞だが、懸案の＜事案を実行する＞という言い方でもあるようで、ついに源氏殿は＜笛を薫殿に譲渡した＞ということらしい。この笛が故衛門督の遺品であることは公然とまでは行かないにしても、決して秘事ではなく、関係諸氏の周知する所ではあったのだろう。だとして、この譲渡は表向きは結婚祝いの品という扱いだろうが、源氏殿にとっての意味するところとしては、恐らく薫殿は故衛門督の遺児である、という認識と、それでも今回の内親王との結婚で更に地歩を得たかに見える薫殿なのだから、やはり自分の弟として共に六条院勢力を形成しよう、という意向の再確認であると共に、その含みを薫殿に暗示することになりそうだ。が、薫殿は自分が故衛門督の遺児である事を故人の手紙という証拠によって確認しているので、その遺品を得る事の意味に、兄の源氏大臣殿が思う＜共に六条院勢力を担う＞という一体感意識とは、どこか微妙なズレはあるのだろう。

大臣和琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ（大臣には和琴、三の宮には琵琶など、それぞれに応じた楽器を天皇は弾かせなさいます）。*大将の御笛は（ついに大将は譲り受けた故父君の遺品の笛を）、今日ぞ（本来の持ち主を得た今日という日なので）、世になき音の限りは吹き立てたまひける（この上なく良い音色で吹き上げなさいました）。殿上人の中にも（階下の役人の中からも）、唱歌につきなからぬどもは（歌唱に覚えが無いでも無い者たちは）、召し出でて（指名されて）、おもしろく遊ぶ（情趣豊かに謡います）。　*「だいしゃうのおおんふえ」が今後登場する場面はもう無いのかも知れないが、是はついに薫殿が故父君の遺品を手にしたことを示す言い方ではある。

宮の御方より（藤壺宮の御部屋社中から）、粉熟参らせたまへり（餡子餅が振舞いなされました）。沈の折敷四つ（ぢんのをしきよつ、沈香木製の角盆四つを）、紫檀の高坏（したんのたかつき、紫檀の高脚台に乗せて）、藤の*村濃の打敷に（藤色の濃淡ぼかし染めの敷布には）、*折枝縫ひたり

(藤垂れの数筋が刺繍されてあります)。銀の様器(しろかねのやうき、銀の取皿に)、瑠璃の御盃(るりのおおんさかづき、ガラスのコップ)、*瓶子は紺瑠璃なり(酒瓶は紺色のガラス製という唐物趣向でした)。*兵衛督、御まかなひ仕うまつりたまふ(兵衛督が天皇に代わって給仕役を仕え申しなさいます)。　*「村濃(むらご)」は＜染め色の名。同じ色でところどころを濃淡にぼかして染め出したもの。＞と大辞泉にある。「打敷(うちしき)」は＜調度などの下に敷く布。＞と大辞泉にある。　*「をりえだぬひたり」は注に＜藤の折枝の刺繍。＞とある。　*「瓶子(へいし)」は＜酒瓶・徳利＞。　*「ひゃうゑのかみ」は先に紹介された藤原右家長男の左兵衛府長官。従四位下相当官だが、中納言や参議で兼ねた者が多い、と古語辞典にある。従三位相当の中納言に三男が就いているとあるので、三位の参議だった可能性が高い。「御まかなひ」の「御」は帝への敬称なのだろうが、「まかなひ」は＜応接＞ではなく＜間に合わせ＞なので、文意は天皇に対する給仕ではなく、主催者の天皇に成り代わって招待客の諸侯に給仕して回る役を務めた、と読んで置く。

*御盃参りたまふに(天皇からの御盃を頂戴申しなさるのに)、大臣、しきりては便なかるべし(大臣ばかりが何度もでは具合が悪く)、宮たちの御中にはた(列席の王族方の中には)、さるべきもおはせねば(この宴席で御杯を受け申すに相応しい方もいらっしゃらないので)、大将に譲りきこえたまふを(その受け役を大臣は御婿たる大将に譲り申しなさるのを)、憚り申したまへど(大将は大役畏れ大しと辞退申しなさるが)、御けしきもいかがありけむ(天皇の御意向も如何ばかりかあったらしく)、御盃ささげて(御盃を持ち上げて)、「*をし」とのたまへる声づかひもてなしさへ(「をし」と賜杯を感謝申しなさる大将の声の張り方や姿勢まで)、例の公事なれど(型通りの仕方ながら)、人に似ず見ゆるも(他人と違って立派に見えるのも)、今日はいとど見なしさへ添ふにやあらむ(今日はいっそう天皇の婿殿との見做しが加わっている所為かもしれません)。*さし返し賜はりて(大将が土器に移し替えた御酒を飲み干して)、下りて舞踏したまへるほど(階下の庭先へ下りて謝礼の作法をお取りなさる姿は)、いとたぐひなし(本当に例えようも無く素晴らしい)。　*「おおんさかづきまゐりたまふ」は＜御酒を召し上がりなさる＞だろうが、この「御酒」は天皇の賄い酒なので＜天皇から盃を頂戴なさる＞ということになるらしい。　*「をし」は注に＜天杯を戴いた時に発する作法の声。「をし」という。＞とある。「愛し・惜し」なら＜有難い＞みたいな言い方だろうか。原義未詳の作法の声、なのだろうか。　*「差し返し」は＜移し替え＞らしく、大辞泉には＜天皇から杯を賜ったとき、その酒を移しかえて飲む土器(かわらけ)。＞とある。何のことだか良く分からないが、そういう作法なのだと思う外は無さそうだ。

上臈の親王たち(じゃうらふのみこたち、上席の王族たちや)、大臣などの賜はりたまふだにめでたきことなるを(大臣などが天皇から御酒を賜るのでさえ光栄な事なのを)、これはまして御婿にてもてはやされたてまつりたまへる(大将は更に身分が低いのに御婿という身内筋の縁によって厚遇され申しなさって)、御おぼえ、おろかならずめづらしきに(帝の御認識は格別に高かったが)、限りあれば(分相応に定められた格式に則って)、下りたる座に帰り着きたまへるほど(下座に戻って着座なさるのは)、心苦しきまでぞ見えける(勿体無くも思われました)。

[第七段　女二の宮、三条宮邸に渡御す]

按察使大納言は、「我こそかかる目も見むと思ひしか、ねたのわざや」と思ひたまへり(藤原大納言は、自分こそ藤壺宮の結婚相手になって、帝の御婿の栄光に浴したいと思っていたのに、妬ましいことだ、と思っていらっしゃいました)。この宮の御母女御をぞ、昔、心かけきこえたまへりけるを(藤原殿はこの宮の御母女御を昔、恋い慕い申しなさっていらっしゃったのを)、参

りたまひて後も、なほ思ひ離れぬさまに聞こえ通ひたまひて(女御が後宮に参内なさった後も、尚も諦め切れないと御手紙を遣り取りなさって)、果ては宮を得たてまつらむの心つきたりければ(遂には女二の宮を娶り申したいと考えるようになり)、御後見望むけしきも漏らし申しけれど(御世話役を申し付かりたい意向も滲ませ申したが)、聞こし召しだに伝へずなりにければ(帝がお聞き知りなさるところまで伝わらなかったので)、いと心やましと思ひて(とても不満に思って)、

「人柄は(大将という人は)、げに契りことなめれど(なるほど格別な家格の生まれだろうが)、なぞ、時の帝のことことしきまで婿かしづきたまふべき(どうして今上の天皇が高い格式で婿可愛がりなさる相手として良いものだろうか)。またあらじかし(こんな例は他にないだろう)。

九重のうちに(宮中の)、おはします殿近きほどにて(天皇の御座所の清涼殿に近い、この藤壺に)、ただ人のうちとけ訪らひて(臣下身分の大将が親しく出入りして)、果ては宴や何やともて騒がるることは(挙句に祝宴だの祝杯だのと持てはやされるとは)」

など、いみじく誹りつぶやき申したまひけれど(などと口を極めて悪口をつぶやき申しなさったが)、さすがゆかしければ(それでも実況見分を確かめたいので)、参りて(この宴に参列しては)、心の内にぞ腹立ちゐたまへりける(内心では腹を立てて座していらっしゃったのです)。

紙燭さして歌どもたてまつる(列席者は手元の灯りをともして帝に祝歌を献上申します)。文台(ぶんだい、提出机)のもとに寄りつつ(に近付いて)置くほどのけしきは(作品を置く時の表情は)、おのおのしたり顔なりけれど(各人得意気だが)、例の(例によって、こういう公式の宴会での歌詠みは)、「いかに*あやしげに古めきたりけむ(どの道、型にはまった古めかしいものだろう)」と思ひやれば(と思い遣られるので)、あながちに皆もたづね書かず(敢えてそれらの歌のすべてを調べて書くことはしません)。　*「あやしげ」は与謝野訳文に＜型にはまった＞とある。この「あやし」は「妖し・怪し(変だ)」ではなく「肖やし(あやかりがち＝前例を踏襲する＝型にはまる)」かも知れない。

*上の町も(上流階級の人々も)、上臈とて(身分が高いからといって)、御口つきどもは(御歌の詠みっぷりは)、異なること見えざめれど(格別なことは無さそうだが)、しるしばかりとて(その場での出来栄えの目安として)、一つ、二つぞ問ひ聞きたりし(一つ、二つは尋ね聞きました)。これは(次の歌は)、大将の君の、下りて御かざし折りて参りたまへりけるとか(大将の薫君が、庭へ下りて天皇の冠に挿す藤の枝花を折ってお詠みなさったものだとかいうことです)。　*「かみのまち」は＜第一級。一流。＞と古語辞典にある。「町」は田の区画を示す語だったようで、それが区分・区別を示すことにもなり、物事の＜等級・階級＞をいう語用もされたらしい。

「すべらきのかざしに折ると藤の花、及ばぬ枝に袖かけてけり」(和歌 49-20)

「藤の花　つい手が触れた　先の枝」(意訳 49-20)

*注に＜薫の詠歌。及びもつかない高貴な内親王を頂戴した、という意の歌。＞とある。「すべらき」は「すべらぎ」として＜天皇。「すめらぎ」に同じ。＞と古語辞典にある。さて、「天皇」という漢字表記は律令期に中国古典から転用した国体人物を示す称号のようで、総責任者として民を支配する＜王(大)＞という存在を、天命によって支配す

ることを運命付けられた、とのように恭しく修辞した呼称、という印象だが、それに近い和語表現が「すべらき・すめらぎ」あたりだったとすると、「すべらき」は「おほきみ(大君、偉大で尊いお方)」よりも神秘性を意図した言い方なのかも知れない。また、「すべら・すめら」という神聖性のある接頭語は「統ぶ(すぶ、支配する)」という語と同源概念を思わせるが、あまり短絡に「すべらき」を＜統一王＞みたいに考えるのは上滑りかも知れない。似たような語に「術(すべ)」や「素晴らし」や「済む・住む・澄む」や「墨・炭」また「すまふ・相撲・争ふ」などの広がりがあるので、元の概念を狭く想定しない方が無難そうだ。が、そうなると「すべらき・すめらぎ」は語感が掴み難いまま、天皇＝帝＝みかど、を示す語と知る他はない。ただし、明治期以降の国際軍備体制下での日本国国体を意図した現行の天皇制に規定想念された「天皇」という存在と、当時の大陸(唐)と半島(高麗)に対する独立国体を意図した農耕経済に拠って立つ単位社会の祭祀権威としての「すべらき」という存在とには、尊ぶべき継承性と見直すべき異質性が混在していることを整理して再認識しなければ、この国は新たな時代を築けないだろう。農耕社会の自立経済と定住性に独立国家の永続的な幸せを求めて祭祀行事の尊厳を再確認し、しかし同時に、貨幣記号の共通合意に基づいた国際貿易で豊かな日常生活を送る経済活動を企画する以上は、その祭祀行事は様式の継承性こそ守るべきものであり、その為の組織維持は明文法制化されなければならないが、その実質的な意味は、農業立国を国是として国土保全を図るという象徴的な意識形成に有るのであって、実体経済が工業技術と流通情報の高生産性に支えられている現実に照らせば、その儀典回数と様式による生活慣習への制限は最小限に留めざるを得ない。要するに、現行の宮中儀式や地域祭礼を大事にして行く他は無いのだが、どういう制度設計でそれらが維持できるのかは、大方の日常経済活動との摺り合わせで、その決定は実は相当に難しそうだ。しかも、現行の天皇家および周辺皇族に相応な資産を与えて、また全国の神社仏閣に優遇税制措置を講じても、その有効性に何の保証も無い。むしろ早々に、皇室や寺社は伝統様式を研究する権威機関として組織制度化して、歴史的重要性は認めつつもあくまで社会構成要素の一部分という立場を確立すべきで、日本国の国体としては国際標準に則った、統治機構を民主的合意で基準制定した法治主義で運営する組織体系で、日本列島を主管し、日本語を共通認識手段とする人間集団体制、という主張を内外に示すべきだろう。難しい話題なので手間取るが、歌に戻る。「すべらきのかざしに折ると藤の花」は、実際に藤の花を添えて帝に捧げてこの歌を詠んだとすれば、素晴らしい貴人の髪挿し用にとこの藤の花を折ったら＝上様に懸命に仕えていましたら、で、「及ばぬ枝に袖かけてけり」は＜手前の枝に袖を掛けてしまいました＝姫に手が触れてしまいました＞という言い訳めいたのろけで、よく言うもんだが、こういう戯けた事が言えるのが歌なのだろう。

うけばりたるぞ、*憎きや(背負ってるのが、さぞ大納言には憎らしいことでしょう)。　*「にくし」は藤原大納言の目線なのだろう。

「よろづ世をかけて匂はむ花なれば、今日をも飽かぬ色とこそ見れ」(和歌 49-21)

「藤波に 今日は一際 匂う色」(意訳 49-21)

*注に＜帝の詠歌。「花」「かける」の語句を受けて詠む。『異本紫明抄』は「かくてこそ見まくほしけれ万代をかけてしのべる藤波の花」（新古今集春下、一六三、延喜御歌）を指摘。＞とある。延喜御歌(えんぎのみうた)は「やまとうた」サイトの「千人万首」トピックの「醍醐天皇」ページに＜延喜二年(902)三月二十日、藤原時平が主催した飛香舎（藤壺）の藤花の宴で詠んだ歌。醍醐天皇の女御藤原穏子（時平の同母妹）が入内した翌年のことで、「藤浪の花」に穏子を、ひいては藤原氏の栄を祝う心を籠めているのだろう。平安以後、公宴で和歌が行われた最初とされる。＞と補説があり、醍醐天皇(在位 901 年 7 月 15 日～923 年閏 4 月 11 日)が在位中に詠んだ歌ということで、この歌が下敷きされていることと、当時の宮廷読者がこの醍醐天皇の歌を思い出す事で、作者が当歌を帝の歌として掲載した狙いは達成されたのだろう。その上で、当歌における工夫は「今日をも飽かぬ」の格助詞「を」だろうか。

この一字が無ければ、歌筋は＜いつも目立つ花なので今日もきれいだ＞だが、この「を」があるだけで＜いつもきれいな花ではあるが今日は一段と見事だ＞となりそうだ。大将の献花に対する返礼であり、二人の門出を祝ってもいるのだろう。天皇の本心は姫宮の幸を願う一心だろうから、この歌詠みの文言から特にそれが感じられることは私には無いものの、この場の情緒として、それは万人に知れたのだろう。

「君がため折れるかざしは、紫の雲に劣らぬ花のけしきか」（和歌 49-22）

「藤の花 紫雲の 御目出度さ」（意訳 49-22）

*注に＜夕霧の詠歌か。「花」の語句を用いて、前歌の「色」を「紫」ととりなして詠む。『河海抄』は「紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらむ」（拾遺集雑春、一〇六九、右衛門督公任）。『休聞抄』は「藤の花宮のうちには紫の雲かとのみぞあやまたれける」（拾遺集雑春、一〇六八、皇太后宮権大夫国章）を指摘。＞とある。「紫の雲」は古語辞典に＜天人などの乗る雲。＞とあり、「紫の雲路(むらさきのくもぢ)」が＜極楽の空。＞とある。「紫の雲に劣らぬ花のけしきか」は＜極楽を見る思い＞という祝辞らしい。

「世の常の色とも見えず雲居まで、たち昇りたる藤波の花」（和歌 49-23）

「藤の花 手折って昇る 雲の中」（意訳 49-23）

*注に＜紅梅大納言の唱和歌。「色」「雲」「藤」「花」の語句を用いて、女二宮と薫の結婚を寿ぐ。＞とある。上の源氏大臣の歌を下敷きにすれば、当歌も「世の常の色とも見えず雲居まで」は＜まるで極楽浄土のように＞という言い方の祝辞に見える。が、その実、大納言は何を褒めているのかと言えば、藤の花自体の見事さ、に過ぎない。その見事な花を髪に挿した天皇が雲居に居たところで、当然のことだ。だから一応は、この日の藤壺の光景を素晴らしいと褒めてはいるが、「藤波の花」がそれを手折った薫大将のことと見立てると、臣下に許されるとも思えぬ御宮にまで立ち入った思い上がり者め、という皮肉というか非難に聞こえるし、一度そう聞こえたら、もうそうとしか聞こえない。

「これやこの腹立つ大納言のなりけむ(この歌がこの腹を立てた大納言のだろう)」と見ゆれ(と思えますが)、かたへは(いくらかは)、ひがことにもやありけむ(聞き違いがあるかもしれません)。かやうに(このように)、ことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし(特に情趣深いものもなかったようです)。

夜更くるままに(夜が更けるにしたがって)、御遊びいとおもしろし(演奏はとても盛り上がります)。大将の君、「*安名尊」謡ひたまへる声ぞ、限りなくめでたかりける(大将君が催馬楽の「あなたふと」をお謡いになった声はこの上なく優れていました)。按察使も、昔すぐれたまへりし御声の名残なれば、今もいとものものしくて、うち合はせたまへり(藤原大納言も昔秀でていらした御声の素地が残っていて今でもたいそう堂々と合唱なさいました)。右の大殿の御七郎(源氏右大臣の七郎君が)、童にて笙の笛吹く(童殿上で同席していて笙の笛を吹きます)。いとうつくしかりければ、御衣賜はす(とても可愛いので天皇が褒美の御衣装を与えなさいます)。大臣下りて舞踏したまふ(大臣は庭へ下りて拝舞の礼をなさいます)。　*「安名尊(あなたふと)」は既に何度か引かれている催馬楽で、ほぼ＜ああ目出度い＞という祝言葉だけの歌で、宴会の定番調子だったらしい。

暁近うなりてぞ帰らせたまひける(明け方近くになって天皇は清涼殿にお帰りあそばしたのでした)。禄ども(引出物は)、上達部、親王たちには、主上より賜はす(高官と王族には天皇からお与えなさいます)。殿上人、楽所の人びとには、宮の御方より品々に賜ひけり(上級役人と蔵人には姫宮の方から身分に応じて与えなさいました)。

その*夜ふさりなむ(その日の夜になり出した頃に)、宮まかでさせたてまつりたまひける(薫大将は藤壺宮にご退出頂き申しなさいます)。儀式いと心ことなり(その移動行列編成は特別仕立でした)。*主上の女房さながら御送り仕うまつらせたまひける(天皇は御所の女官勢揃いで姫宮をお見送り申させなさいます)。*庇の御車にて(姫宮は唐破風屋根の庇付きの御車で)、庇なき糸毛三つ(続く庇無しの糸毛装飾車が三台)、黄金づくり六つ(金具装飾車六台)、ただの檳榔毛二十(通常の檳榔毛の車二十台)、網代二つ(網代車二台が連なり)、童、下仕へ八人づつさぶらふに(童女と下女が八人づつが付き従うところに)、また御迎への*出車どもに(一方の三条宮邸から姫宮を御所まで御迎えに上がった裾出し牛車数台に)、*本所の人びと乗せてなむありける(薫殿は自宅の女房たちを乗せていました)。御送りの上達部、殿上人、六位など(天皇は御送り役の高官、上級役人、六位の近侍蔵人などを)、言ふ限りなききよらを尽くさせたまへり(言い尽くせないほど華美に飾り立てさせなさいました)。　*「夜ふさり」は「よひさり」「ようさり」「夜さり」とも言い、「さり」は「去る(変わる・引けて行く)」の連用名詞らしく、「夜去り」で＜夜になる頃＞と大辞泉にある。　*「うへのにょうばう」とは内侍司(ないしのつかさ)の女官を言う、のだろう。「さながら」は＜ちょうどそのまま＝すっかり丸ごと＞だから、「主上の女房さながら」は＜御所の女官勢揃いで＞みたいな華やかさ。　*「ひさしのおおんくるまにて」の「御」は姫宮を示すので、是は＜宮は廂の牛車で＞という言い方。で、「庇の車」は「風俗博物館」サイトの「牛車の種類」ページなどによると＜唐破風(からはふ)造りの屋根と庇(出入り口の雨避け張り出し屋根)付きの牛車＞らしい。また、この牛車の屋形構造は＜ヒノキの薄い板を編んで作る網代車＞というもののようで、続く「庇なき糸毛三つ」という言い方にしても、牛車屋形の基本構造は網代車で、その＜屋形の表を色糸で飾ったもの(大辞泉)＞を糸毛車(いとげぐるま)と言うとのことで、その外観形状のことらしく、以下の「黄金づくり(こがねづくり)」も「檳榔毛(びらうげ)」も装飾の説明のようだ。　*「出車(いだしぐるま)」は＜盛儀の出行の際の装飾として、出衣(いだしぎぬ)を施した牛車(ぎっしゃ)。また、随行の女房の装束の裾を出衣とした牛車。＞と大辞泉にある。　*「本所(ほんじょ)」は三条宮邸のことだろうが、是は薫殿の立場で＜自宅＞をいう言い方なのだろう。

かくて(こうして薫大将は姫宮を自宅にお迎え申しなさって)、心やすくうちとけて見たてまつりたまふに(落ち着いて親しく拝し申しなさると)、いとをかしげにおはす(姫宮はとても可愛らしくいらっしゃいます)。ささやかにしめやかにて(小柄でしとやかで)、ここはと見ゆるところなくおはすれば(何処と言って欠点も無くいらっしゃるので)、「宿世のほど口惜しからざりけり(こういう人と結ばれるとは、私の定められた宿縁も、出生事情から懸念されたような、惨めなものではなかったのだ)」と、心おごりせらるるものから(自信が出て自慢に思えるものの)、過ぎにし方の忘ればこそはあらめ(亡くなった宇治姉君が忘れられるなら良いのだが)、なほ紛るる折なく(今も尚、気が紛れる時が無く)、もののみ恋しくおぼゆれば(その事ばかりが悲しく思われて)、

「この世にては慰めかねつべきわざなめり(現世にあっては心穏やかにはなれない事柄なのだろう)。仏になりてこそは(仏心の悟りを得れば)、あやしくつらかりける契りのほどを(何故か不幸だった二人の定めを)、何の報いと諦めて思ひ離れめ(因果を知って諦めが着くだろう)」

と思ひつつ(と思いながら薫殿は)、寺の急ぎにのみ心を入れたまへり(寺の造営にばかり熱心でいらっしゃいました)。